**「ナラリシ」**

2020年2月16日

逗子例会（午後の講話）

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ 第158 回生誕祝賀会

スワーミー・メーダサーナンダによる講話

於：逗子本部別館

　シュリー・ラーマクリシュナはナレーンドラナート（のちのヴィヴェーカーナンダ）に出会う以前に、彼が天国の高いところで、7人の聖者の1人としてサマーディに没入しているヴィジョンを見ました。天界にはさまざまなレベルの聖者や賢者が存在します。神道でも信仰しているような風の神や山の神といった普通の神も存在しますが、強烈に放棄したその聖者たちは、霊性のレベル、神への愛において、とても高い場所にいました。7人の聖者をサンスクリット語で「サプタリシ」と言いますが、シュリー・ラーマクリシュナが見たその1人はナラリシだったので、シュリー・ラーマクリシュナは、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ（スワーミージー）はナラリシの化身である、と言いました。ナラリシは師の要求に応じて師の仕事を助けるために、人として生まれたのです。かなり後で、ある兄弟弟子はスワーミージーが本当のところ自分がだれか知っているのか、つまり彼はナラリシの生まれ変わりなのかどうかを知りたがりました。スワーミージーは「はい、私は自分が誰か知っています」と答えました。

スワーミージーにまつわる賛歌が二つあります。一つはスワーミー・ラーマクリシュナーナンダが作ったスワーミージーへの賛歌で、もう一つはスワーミー・サーラダーナンダが作った、シュリー・ラーマクリシュナ、ホーリー・マザー、そしてスワーミージーを含む直弟子への賛歌です。

前者の賛歌の最後の2行は、ラーマクリシュナ・ミッションではスワーミージーへの礼拝のプラナーム・マントラとして用いています。 「ナマ シュリー ヤティ ラジャヤ ヴィヴェーカーナンダ スーラエ、サット チット スカ スワルパヤ スワミネ タパハリネ」という歌詞の中の「サット チット スカ」は、スワーミージーの本性である「絶対の存在、絶対の意識、絶対の至福」を意味します。

後者の賛歌では、スワーミージーを「パラタットワ サダリナ」つまり、スワーミージーは常に最高の真理と一つになっている、と描写しています。このようにどちらの賛歌もスワーミージーはブラフマン意識と一つになっていたことをあらわしています。

しかしもし、スワーミージーが本当に常にサマーディに没入していたのなら、彼はいかなる仕事もできなかったはずだ、ということは容易に想像できます。

そうなると、これは明らかに矛盾です。にもかかわらず、師シュリー・ラーマクリシュナが亡くなった後、スワーミージーはインドをくまなく旅しました。後には世界宗教会議に出席するためにシカゴに旅立ち、そしてヨーロッパ、アメリカなどの西洋にヴェーダーンタを教え広めました。そしてインドに戻るとラーマクリシュナ・ミッションを設立したのです。もし彼がつねにサマーディに没入していたのなら、全ての仕事をどのようになし得たのでしょうか？ それらは矛盾した話ではありませんか？

それについて、ヨーギーは精妙な体は体内の、ムーラーダーラ（根）、スワーディシュターナ（仙骨）、マニプラ（太陽神経叢）、アナーハタ（ハート）、ヴィシュッダ（喉）、アージュニャー（第三の目）、サハスラーラ（冠）、の七つのチャクラつまりエネルギーセンターからできている、言っているのですが、ある時スワーミー・トゥリヤーナンダジは、ホーリー・マザーの心は決してヴィシュッダ・チャクラより下がることはなかった、と述べました。そのような状態で、彼女がどのようにあらゆる仕事をしたのか、人びとをどのようにお世話したのかは、とても大きな神秘です。

スワーミージーが初めてシュリー・ラーマクリシュナのもとを訪れたとき、シュリー・ラーマクリシュナがスワーミージーに触れると、彼はすべての外の意識を失い、自分の本当の本性が呼び覚まされ、そして気づきが出ました。スワーミージーは表層の部分では、まだ自分がサプタリシであることに気づいていなかったけれど、ラーマクリシュナの霊的な一触れにより、忘我の状態の中で自分の本性を理解することができたのです。スワーミージーが師の強い霊的一触れで自分の真の本性を思い出すことができた、ということは、スワーミージーと一般的な人との意義のある違いです。

どうすれば、無限で永遠なるブラフマンが、例えばシュリー・ラーマクリシュナのような有限な人間としてあらわれることができるか、ということは大きな神秘ではありませんか？ どうすれば無限が有限になることができるのでしょうか？ そのことはあらゆる論理に逆らっています。しかし私たちは近代の神人シュリー・ラーマクリシュナという証拠から、サット・チット・アーナンダ・ブラフマンが、人間の形となり、絶対の平安、喜び、知識、真理への道を人類に伝えた、ということを知ります。これが意味するところは、スワーミージーは常に絶対の真理と一つになっていたにもかかわらず、彼は神の意志の代弁者としてこの世での使命を果たすことができた、ということで、それは否定できない事実です。

スワーミージーは通常の状態のときも、絶えず自分の本性に気づいていました。一方で私たちにとっては体意識が通常の状態です。私たちは常に存在する体意識のせいで、この「魂意識」という心の状態を想像することすらできません。しかし、スワーミージーの場合、心が神意識に没入していても、心のごく一部でこの世界の気づきを保ち、それで人類の幸福と健康のために非常に多くの仕事を成し遂げることができました。

シュリー・ラーマクリシュナの近しい在家信者で、有名な劇作家で俳優でもあったギリシュ・チャンドラ・ゴーシュは、マハーマーヤーの縄について興味深い発言をしました。マハーマーヤーは肉体となってあらわれた魂を、幻惑という縄で縛ります。ギリシュは、マハーマーヤーには彼女の縄で縛ることができなかった人物が二人だけいた、と言いました。一人はスワーミージーで、もう一人はナーグ・マハーシャヤ（シュリー・ラーマクリシュナの在家弟子）でした。マハーマーヤーの縄とは何でしょうか？ それは、私たちの欲望、執着、欺瞞、サムスカーラ（心理的痕跡）を象徴しています。

ギリシュはスワーミージーについて、根本エネルギーであるマハーマーヤーは無限に近い長さの縄を確かに持っているが、彼女がいくらスワーミージーを縛ろうとしても、彼はどんどん大きくなり続け最後には無限の存在と一つになったので、縛ることができなかった、と説明しました。ギリシュはナーグ・マハーシャヤについて、彼はあまりに控えめだったので、マハーマーヤーが彼を縛った縄の結び目から抜けることができたのだ、と言いました。

ここで、スワーミージーがアメリカに滞在中に実際に起こったことをご紹介します。ミス・サラ・エレン・ワルドゥという霊性の求道者は、彼女を導いてくれる全く欠点のない特別な先生を探し続けていました。彼女は先生を見つけるたびにその人のもとで真剣に勉強するのですが、先生の過ちや何かに不満を抱くと、その関係は終わりました。何人かの先生との間でそのような経験を繰り返していたので、彼女はすこし失望していました。

彼女はスワーミージーのことを知ると彼の講演に出席し始め、さらには信者になりました。しかし彼女は心の底では、自分はまだスワーミージーの過ちを見つけていないが、やがて何らかの過ちを見つけるかもしれない、と心配していました。ニューヨークでのある日のこと、彼女はスワーミージーと他の信者たちとビルの一階にいました。そこには、細長い応接間があり、その入り口は折り戸でその向かいには2つの大きな窓がありました。そして折り戸と窓の間には床から天井まで届く大きな鏡がありました。この鏡が非常にハンサムであったスワーミージーを魅了したようでした。彼は深く考えてはあちらこちら歩き回り、鏡の前で何度も何度も立ち止まり、熱心に自分を見つめていました。ワルドゥはそれを見て、自分の恐れが本当になったと感じました。そして心の中で「彼はハンサムを自慢に思っているんだわ」と考えました。

まさにその瞬間、スワーミージーは彼女の方を向いて「エレン、とても奇妙なことに、私は自分がどう見えるか思い出せないのだよ。鏡で何度自分を見ても、そこから離れたとたんに私は自分の容姿を完全に忘れてしまうのだ」と言いました。彼女は、このことは体意識とは逆の状態、つまりスワーミージーはサダリナなのでブラフマン意識にとどまっているのだ、ということを理解しました。私たちはそれとは全く逆で、一度自分の姿を見ると長い間自分がどのような姿であるか覚えています。

アメリカでの数多くの奮闘の末にインドに戻ると、スワーミージーは喘息や糖尿病などさまざまな病気に苦しみ、時には呼吸困難を経験しました。彼が息苦しさで喘いでいる間中ずっと、苦しい一息ごとに、彼の内側からは「シヴォーハム、シヴォーハム」（私はシヴァ）というマントラが聞こえてきた、ということをスワーミージーが明かしたことがあります。喘息で苦しんだことがある人は、喘息発作が続いている間に息をすることがどれだけ大変なことか、そしていかに心が体の苦しみにだけ集中するかを知っています。スワーミージーの生涯に起きたこの出来事は、彼が意識を体と魂とに分け、体が激しい苦境にあってさえ魂に集中することができた、ということを明らかにしています。

彼の永遠なるブラフマン意識を証明するもう一つの例をスワーミージーの生涯からお話します。

シュリー・ラーマクリシュナは「シヴァ ギャーナ ジーヴァ セヴァ」と言いました。その意味は「人の中に神を見てお世話をせよ」で、「奉仕は礼拝」とも言えます。ブラフマンは遍在ですべてに宿っている、ということをスワーミージーはシュリー・ラーマクリシュナから教わりました。

私がいま伝えたい出来事は、スワーミージーの弟子僧侶で、のちにニューヨーク・ヴェーダーンタ・ソサイエティの僧長となったスワーミー・ボダーナンダジが語ったものです。若い修練士であったボダーナンダジと他の僧侶たちは、スワーミージーと共に新しく設立されたベルル・マト（僧院）で暮らしていました。ある日、スワーミージーが「今日、私はシュリー・ラーマクリシュナの礼拝をします」と発表しました。普段、僧侶たちは、既定のマントラや手順の文書に従ってシュリー・ラーマクリシュナへの儀礼的礼拝をしていました。しかし、スワーミージーは儀式的礼拝があまり好きではなかったので、住み込みの僧侶たちはスワーミージーがどのようにシュリー・ラーマクリシュナへの礼拝を執り行うのかが知りたくて、それを見るために礼拝堂へ行きました。いつものように礼拝堂では、サンドルウッド・ペースト（白檀を粉にして練ったもの）や花々が準備され、礼拝に必要な道具はすでに整っていました。

スワーミージーが礼拝堂に入り、シュリー・ラーマクリシュナの写真の前に座り瞑想を始めたので、他の者たちも瞑想を始めました。少し経つと、ボダーナンダジは誰かが彼の前を通った気配を感じました。スワーミージーは正面に座っているのに、いったい誰だろう？ そう思って彼は目を開けました。すると、スワーミージーが花々にサンダルウッド・ペーストを混ぜて、瞑想しているすべての僧侶の頭の上に置いていたのです。通常の儀式的礼拝では、まず花は神様に捧げられ、それから集まった人々は花を受け取り、神様に再び捧げます。

このときスワーミージーは最初に神様ではなく、そこに集まった僧侶たちに花を捧げました。観察者の最初の衝撃は、スワーミージーが儀式的礼拝の規範の無視したこと、言葉を変えると「罰当たり」とも言えることだったことでしょう。しかし実のところスワーミージーは、ブラフマンつまりシヴァが万人のハートに宿っている、という師シュリー・ラーマクリシュナの教えを実践していたのです。スワーミージーは彼の前に座っている僧侶たちをシヴァと見なしました。スワーミー・ボダーナンダジは後に「それはまるでスワーミージーが私たちの内なる神性を目覚めさせたかのようでした」と回想しました。

ですから、私たちも内なる神性を目覚めさせ、常に内在する「その存在」を意識しましょう。